

書評

宇野 彰・波多野和夫 編

高次神経機能障害の臨床はここまで変わった

種村 純 (川崎医療福祉大教授・医療技術学)

本書はタイトルが示すように高次神経機能障害に関する最近のトピックスを解説している。多くの海外文献にあらずとも斯界の最新動向を得られるので、入門の段階を過ぎて自ら勉強を進めようという方には、適当な参考書である。

本書の特徴は、「認知神経心理学」的な観点を強く打ち出していることにある。中枢神経系の、特に連合野の機能に関する臨床・解剖学が従来の神経心理学の基本的的方法論であった。これに対し、内的な処理・操作を認知心理学の方法に基づいて確認し、さらにその神経基盤を求めようとするのが従来とは「変わった」点と言える。

本書が扱う問題は高度に学問的で、理解しやすいわけではない。しかし、図表を多用するなどの工夫をしていて、わかりやすくする努力がなされている。この認知神経心理学は、読み書きの障害に関する分析から始まり、他の障害に広げられていった。英米では、この動向がいちじるしく発展しており、専門雑誌も出されている。

認知的方法の長所の1つに、リハビリテーション

への展開に示唆が得られる点がある。リハビリテーションでは、残存した機能を利用して障害された機能を改善させることになる。「脳の局所病変によりこのような症状が出現する」という知識だけでは、このような介入の計画は立てられず、本書に示されるような詳細な分析がきわめて有効である。

本書の各章でリハビリテーションにも言及している点は、治療者にとって大きな魅力であり、失語症などに関する章に、その有効性が明らかにされている。しかし、どの分野でも認知神経心理学の方法が、十分に認められているわけではない。言語、読字、地理認知、空間無視の問題では、神経基盤と認知課題の詳細な分析との間に見事な対応関係が見いだされている。一方、痴呆、記憶、学習障害という、従来は神経心理学的アプローチが困難であった分野でも成果をあげているが、まだこのような理解は広がっていない。

本書が、これらの分野の臨床家に広く受け入れられることを願っている。

(A5 頁176 3,800円+税 2002 医学書院刊)